

この度、第14回 Travel Award for Women Cardiologist (JCS/TAWC)よりご支援を賜り、オランダ・アムステルダムで行われた European Society of Cardiology 2023 に現地参加した。今回は、世界的なコロナ政策の撤廃後初の ESC となったこともあり、世界各国から3万人を超える参加者が集い大盛況に終わった。国際学会としても稀に見る規模となった今回の ESC では、私の専門である心不全領域においては、RCTの結果報告に加え、心不全ガイドラインのアップデートも発表され、規模だけではなく内容も非常に充実したものとなった。そのような中、学会初日に Moderated poster として慢性心不全患者における、GDF15 と BMI との関連について発表する機会に恵まれた。昨今、心不全領域における新たなバイオマーカー候補として注目されている GDF15 は、炎症や線維化といった病態とは別に摂食障害に関与することが知られており、心不全のカヘキシア（悪液質）で上昇することが報告され治療対象としても検討が進められている。一方で、心不全発症のハイリスク群である肥満患者においては、炎症が惹起されやすい特有の病態や糖尿病の合併などに関連して、GDF15 が上昇しているとの報告もある。今回の私たちの報告では、慢性心不全患者において GDF15 は BMI が 18.5kg/m^2 未満の痩せで大きく上昇していたものの、肥満患者においては有意な上昇は認められなかった。一方で、GDF15 の上昇は、比較的予後が良好であった肥満心不全患者においても痩せ患者同様に予後予測因子として有用であることが示された。会場からは、急性心不全患者における GDF15 の動向や、現在実施中の心不全カヘキシア症例における GDF15 抗体の臨床試験に関する質問などがあり、心不全領域における GDF15 への世界的な関心度の高さが伺えた。

学会に現地参加する目的として、発表・講演を行うことに次いで重要なことは、海外医師や研究者とのネットワーキングと考えており、今回も多く参加者と交流することができた。数年ぶりに晴れて現地参加することが叶った今回の ESC では、同じ課題に取り組む研究者同士、直接対面で意見を交換する機会の重要性を再認識した。米国ボストンへ留学していた際に師事していた Prof. Scott Solomon やシンガポールで指導を受けていた Prof. Carolyn Lam のみならず、当時一緒に切磋琢磨していた多くのフェロー仲間と再会することもできた。当時肩を並べていた仲間が活躍する姿や、自分よりも若い研究者たちが奮闘する場面に立ち会うことで私自身も非常に感化され大変な刺激となった。また、それぞれの“ボス”や各々が取り組んでいる研究を互いに紹介し合うことで新たな出会いにも恵まれ、今後の共同研究に対する一層の意欲が掻き立てられた。今回の ESC には、日本を含め韓国、中国、台湾など東アジア各国・地域からも多くの医師・研究者が参加していたこともあり、同じ地域と言えども多様性に溢れるアジア太平洋地域での心不全治療や研究についても情報交換を行うことができた。オンラインで容易に繋がることのできるようになった今日においても、やはり現地で壇上に立ち研究成果を発表し、最新の知見を深め、同じように臨床・研究に取り組む同士の存在を身をもって感じ得たことは、今後の自分の研究活動における一層の励みとなった。最後にはなったが、この度 ESC2023 への現地出席を援助して下さった、日本循環器学会ダイバーシティ推進委員会の皆様、そして日ごろより私の研究活動をご支援下さる恩師の先生方・関係者の皆様方に感謝の意を表し、ESC2023 発表報告とさせていただきます。